

全体を通して

すべての項目で、肯定的な評価が多かった。学校長の考える学校経営グラウンドデザインのもと、全教職員が一丸となって学校活動に取り組んでいると言える。ただA評価とB評価の割合をみると、多くの項目でB評価の割合が高くなっているため、細かな課題を精査し児童、教職員ともに安心して学校生活が過ごせるような学校をめざしていきたい。また、小中一貫教育に関しては、一部CD評価も見られることから、改善すべき点を洗い出す必要がある。

御勅使中学校区小中一貫教育（1～3）

◎おおむね肯定的な評価が多かったが、一部で改善が必要と考える評価が見られた。

- ・小中一貫学校運営協議会を核として、御勅使中学校区3校で小中一貫教育研究会を組織しながら連携の取り組みを進めてきた。中学校区での学校運営協議会のあり方については今後も最適解を探っていく必要がある。
- ・小中一貫教育学校目標である「ふるさとを愛し、生きる力を備えた児童生徒の育成」の実現については、昨年度に比べてB評価の割合が高くなっており、小中一貫教育について教職員の意識に課題がある。
- ・小中の児童生徒の交流や教職員の交流については、昨年度に比べるとA評価が大きく下がりB評価の割合が高くなっている。小中合同でのあいさつ運動や中学校と小学校2校との合唱交流会など具体的な取り組み等は例年通りなので、どこに課題感があるのかを探っていく必要がある。今後はさらに小中連携の取り組みの充実を図りながら、小学校2校の連携についても取り組んでいきたい。
- ・「御勅使スタンダード」の実践については、昨年度と比較するとA評価の割合が下がりB評価の割合が高くなった。「御勅使スタンダード」を小中一貫で取り組む中で、もう一度全職員で共通意識を持てるような取り組みが必要であると感じた。引き続き「御勅使スタンダード」を常に意識しながら教育活動を行えるようにしていきたい。

学校教育目標、経営方針・学校運営（4～10）

◎AB評価の割合に若干の変動は見られるものの、すべての項目において、肯定的な評価であった。

- ・年度当初に確認した学校教育目標や指導重点については、B評価の割合が高くなっているものの各職員が目標を共有しながら、同じ方向を向いて学校教育に参画している状況が確認できた。
- ・「PDCA サイクルに基づいた改善の意欲」についても昨年度に比べるとB評価の割合が高くなっているものの、教職員が日頃からより高いレベルでの教育活動を目指して取り組んでいる様子は伺える。「校務分掌に基づいた学校運営の参画」については、複数の教職員が協働しながら機能的に動けるよう取り組んできた。また、「職員の相互理解・信頼関係」「チーム源の下での指導」についても評価が高く、職員が相互に連携を取りながら一丸となって児童の教育に向かっているといえる。
- ・「危機管理意識の保持」については、職員自身の意識を高める取り組みに加えて、自然災害・事故などの緊急事態、いじめ等の対策など、実際の場面を想定しながら、具体的な取り組みの充実を図っていく必要がある。折に触れて職員間で話題にし、互いに意識化を図っていくことも必要である。
- ・「専門性の向上」については、各教職員の研修履歴にもとづいてより計画的な研修を行っていくなど、職員の教員としての資質向上を目指した取り組みがより重視されている。校内研修等の機会を活用して、現代的な課題に対応できるような専門性の向上を学校全体として取り組んできた。

学級経営、学習指導（11～14）

◎すべての項目において、肯定的な評価であった。

- ・児童理解については、行内委員会やケース会議などを通して個々の児童を共通理解し、学校全体で組織的に支援していく方法が定着してきた。それらがより良い学級経営につながっていると考えられる。ただ、特別な支援を要する児童の割合が非常に高く、解決が難しい事案も多い。職員相互の連携とリレーションを大切にしていきたい。
- ・学習指導に関しては、個別最適な学びの実現に向けて校内研究で実践を共有しながら、学習場面におけるICTの積極的な活用を進めたり、学びの手引きを活用して個人の目標に合わせた学習が進められるよう取り組んだりしてきた。
- ・運動会や学習発表会などの学校行事や縦割り活動などの児童会行事において、6年生を中心として上級生と下級生とのかかわりを意識した活動も増え、それらの取り組みが学校全体の意識の向上につながっている。
- ・基礎・基本の定着に向けてのきめ細やかな指導に関しては、TTの効果的な活用や個別最適な学習の取り組みにより、個々の児童への対応が充実したと考えられる。

児童理解、生徒指導（15～17）

◎すべての項目において、肯定的な評価であった。

- ・「児童の規範意識への指導」については、「あいさつ」「くつの整頓」「時間を意識する」など、全職員で確認しながら指導に当たってきた。多くの児童が落ち着いた生活を送っていると感じる。また、特別な支援を必要としている児童への特性に応じた対応やいじめ・不登校・問題行動への対処についても、担任・教務・養護教諭・特別支援コーディネーターなどが連携し、外部機関も積極的に活用する中で、できるだけ迅速な対応を心がけて取り組んできた。今後も、担当を中心に組織的なチームとしての動きを進めていくことが大切だと感じる。

保護者・地域連携（18）

◎昨年度に比べてB評価の割合が高くなった。

- ・担任や養護教諭が保護者とこまめに連絡を取り合う姿が日常的に見られ、保護者の学校への信頼感を生んでいると感じる。これからも家庭とのきめ細かな連携を大切にしていきたい。
- ・地域の方の学校への関心は依然として高い。地域の方による児童登校中の見守りや、5年生の稲作での田んぼの提供や田植え等の指導、家庭科の授業でのミシン指導のボランティアなど多くの協力が見られた。また、愛育会との連携活動も行っている。今後も地域との結びつきを大切にしたい。
- ・今年度は、150周年ということもあり、記念式典をはじめ様々な記念事業に取り組んだ。そのため、地域の方々に向けての情報発信や地域の方々との連携も例年以上に活発だったように感じる。
- ・学校からのお便りは充実しており、校長による学校だより、各担任による学年通信、各分掌からの保健・図書・給食だよりなど、学校安心メールを積極的に活用した情報提供が家庭との共通理解を育てていると思われる。

R7児童アンケート 考察

全体を通して

全体的に昨年度同様に肯定的な評価が多かった。ただ割合をみると、A評価が減ってB評価が増えている項目もあり、細かく見ると課題も見られた。また項目によってはCD評価の児童も一定数はいる現実もあり、一人一人の児童に寄り添った指導ができるように職員全員で全校児童を見守り、声をかけ、安心感のある学校をめざしたい。

学習・授業について

- ・「学校が楽しいか」の項目については、昨年度よりB評価の割合が高くなり、CD評価の割合も若干であるが増えている。児童にとっての楽しい学校がどんなものなのか、試行錯誤しながら探っていきたい。「学校の授業がわかるか」の項目については、昨年度と同様の結果となっている。個別最適の学びを目指して、児童が自らの学びを調整できるような取り組みが、徐々に成果を上げてきていると思われる。今後も一人一人の学びを大切にしながら、「分かる」楽しさを感じられる授業に取り組んでいきたい。
- ・タブレットを使った学習についても昨年度に比べてB評価の割合が高くなっている。児童の活用能力の向上はみられるので、マンネリ化に陥らないようにより効果的にICT機器を学習場面に活用する方法を検討していきたい。今後もさらに研究を進め活用の幅を広げていきたい。
- ・項目4の「授業中に質問や意見を言う」では、全体的な傾向は同様であるが昨年度よりAB評価をつけた児童の割合が高くなっている。安心して何でも言えるクラスづくりを目標に取り組んできた成果の表れとともに、ペアやグループでの学習が定着してきていることもあり、そのような中で自分の意見や考えをしっかりと持てるような学習ができていると考えられる。
- ・家庭での学習状況については、昨年度に比べて肯定的評価の割合が高くなっている。タブレットの活用が進む中で、家庭学習においてもタブレットを活用する機会が増えたことも一因であると考えられる。今後も家庭と連携する中で本人を励まし、家庭学習の充実を目指したい。

生活面について

- ・6～8の全ての項目において、A評価B評価の割合の違いはあるものの肯定的評価の割合は昨年度同様に高くなっている。授業の中で友だちと協働して学ぶ場面を意識的に作ることで、普段の生活でも友だちと良好に関わる児童が増えているのではないかと考えられる。児童会を中心に、縦割り班を活用した異年齢集団での活動も活発であり、児童同士の人間関係向上につながっている。
- ・項目9の自分から進んであいさつをしているかの項目については、昨年度と同様に肯定的評価の割合が高くなっている。これまでも評価は高かったが、児童会を中心とした学校全体での取り組みがより児童の意識を向上させたと考えられる。今後は、地域の方々へのあいさつも含めて、場面や状況に関わらず自ら進んであいさつのできる児童の育成に取り組んでいきたい。
- ・項目10～11より、学校での決まりを守ったり、役割を果たしたりしている児童の割合は、どちらも昨年度に比べてB評価の児童の割合が大きくなっているが、肯定的評価全体としては同様の値である。各クラスでの取り組みもあるが、児童会を中心とした縦割りでの取り組みの成果である。「掃除をしっかりと」「自分の仕事に責任をもつ」といった良い伝統が根付いていることを感じる。
- ・教師と子どもの関係については、項目12～13より、非常に信頼関係が強いことが分かる。日頃の職員の真摯な取り組みのおかげだと自負したい。今後も全職員で子ども達を見守り、情報交換をしながら、児童の心の安心と安全を図っていきたい。
- ・項目14の自分には良いところや得意なことがあるかの質問には、昨年度より肯定的な評価をしている児童の割合が高くなっており、児童に活躍の場がある学校生活が実現できていると考えられる。今後も一人一人の児童にこれまで以上に目を向けながら、自己肯定感を高めるような取り組みを進めていきたい。

家庭での生活について

- ・早寝・早起き・朝ごはん等の基本的な生活習慣を問う項目については、昨年度と同様に肯定的な評価をつける児童の割合が高かった。委員会活動を通じての全校への啓蒙や始業式や終業式での児童会本部からの

呼びかけも成果を上げていると考える。生活習慣の改善には、家庭との連携と協力が不可欠なので、保護者とのコミュニケーションを図りながら改善につなげていきたい。

- ・項目16は、昨年度より肯定的評価の割合が高くなっており、児童は学校のことについて保護者とよく話をしていくことがわかる。一方で項目17の「災害が起こったときのことを話しているか」については、いまだに話をしていない児童の割合が目立つ傾向がある。地域の特徴を理解しながらいつ起こっても不思議ではない自然災害に対し、家庭でも日常的に話をする機会が増えるよう、学校からも児童、家庭双方に呼びかけていきたい。
- ・項目18については、A評価とB評価の割合に違いはあるものの、肯定的評価全体の割合は変わっていない。場面によっては、地域の方からよく挨拶をしているとの評価を受けることもあるので、一部の児童だけでなく地域とのつながりを積極的に持とうとする児童を増やしていきたい。

わかば支援学校との交流について

- ・今年度も昨年度に引き続き、全学年でわかば支援学校の児童との直接交流を実施することができた。児童の評価でも、90%以上の児童がAB評価をしているように、源小学校の伝統であるわかば支援学校との交流の意義を再確認できた結果であった。今年度は、わかば支援学校の児童が源小に来校して交流を実施するなど、新しい試みも行われた。交流は続けることに意義があるので、今後もさらに交流活動を充実させていきたい。

携帯電話・スマートフォンの使用について

- ・項目20のゲームやパソコン等のルールについては、昨年度に比べてルールを意識する児童の割合が増えたことがA評価の伸びからもわかる。講演会等で話を聞く機会もあり、ルールの重要性について児童と保護者で共通の認識を持てるようになってきていると感じる。SNS等を原因としていじめにつながるケースや犯罪等に巻き込まれるケースも身近な問題として捉える必要も高いことから、引き続き児童への働きかけを継続していきたい。
- ・昨年度に比べると携帯電話やスマートフォンを持っている児童が増えている。ただ、使うときの家庭内のルールについては、「ない」と答えている児童の割合が昨年度に比べて低くなっている。学校では児童および保護者対象でスマホ・携帯教室を開き親子で学ぶ機会を持っているが、今後もこのような機会を継続していく必要がある。

全体を通して

多くの項目で肯定的な評価が多かった。保護者の多くは、学校に信頼をよせていることが分かる。一方CD評価が目立つ項目もあることから、課題を明確にして改善を図っていきたい。

学校生活・学習・授業について

○多くの項目において、肯定的な意見が占めたが、一部CD評価の割合が高い項目も見られた。

- ・項目1の「児童が学校に行くのを楽しみにしている」については、AB評価をしている保護者が84%と多数を占め、昨年同様の結果が見られた。また今年度も児童の評価と比較するとCD評価をつけている保護者の割合がやや多かった。児童の気持ちと保護者のとらえ方に違いが見られた。
- ・項目2の「児童は学習がわかっている」については、AB評価をつけている保護者が85.2%と昨年度より若干下がっている。児童自身の評価は昨年度と同様なので、授業参観や家庭学習の様子等、保護者に児童の実態をしっかりと把握してもらえるように伝える方法等を工夫していく必要を感じた。
- ・項目3の「タブレットを学習に生かしている」については、昨年度に比べると肯定的な評価の割合が若干高くなっている。家庭学習でのタブレットの活用も進み、保護者もタブレットの活用状況をきちんと捉えられていると考えてられる。
- ・項目4の「児童は家庭学習をよくしている」については、児童と比べてCD評価をつけている保護者の割合がやや高い傾向が見られた。保護者の家庭学習に求める姿と児童の実感とで違いがみられた。

人間関係・生活面について

◎いずれも肯定的な評価が多かった。

- ・項目5～6については、AB評価の割合に違いがあるものの、肯定的な回答をしている保護者の割合は昨年同様に高く、児童と同様の結果となっている。項目7「困った時に相談できる友だちがいる」の項目については、児童に比べて肯定的な評価をつけている保護者の割合が少なくなっており、児童の意識と保護者の考えにずれが生じているという結果となった。家庭での児童と保護者のコミュニケーションについても把握していきたい。
- ・項目8のあいさつについては、昨年同様CD評価をつけた人の割合が児童と比較して保護者で高く、児童にもっと積極的にあいさつをしてほしいと考えている保護者が多いことを示している。
- ・項目9・10については、保護者、児童ともに、AB評価が高い割合を示している。きまりをきちんと守ったり、自分の役割をしっかりと果たしたりする児童の実態が反映していることがうかがえる。
- ・項目11・12については、いずれもAB評価が90%を超えていた。担任の関わりはもちろん、全職員で全校児童・全保護者を支援していこうとする姿勢が、保護者にも評価されていると感じる。課題を抱えた児童については、今後も個別での支援を大切にしていきたい。
- ・項目13については、保護者、児童ともに肯定的な評価をしている割合が向上している。児童が自分に自信を持ち、その姿を保護者も感じているということがわかる。

家庭での生活について

○項目によって肯定的な評価が高い項目とCD評価の割合が高い項目があった。

- ・項目14「基本的な生活習慣やしつけに注意を払っている」については、AB評価をつけた割合が90%と高い値を示しており、保護者が児童の生活習慣についてしっかりと気を配って実践している実態がうかがえた。
- ・項目15「お子さんは学校での様子をよく話している」については、AB評価をつけた割合が昨年度に比べて高くなっており、家庭での児童と保護者のコミュニケーション環境の改善が見られた。
- ・項目16～17については、いずれもCD評価をつけた割合がやや多かった。特に災害についての話題については、なかなか家庭で話し合っていない実態が浮き彫りになった。保護者に対して児童と災害についての話をする機会を意識的に作るような働きかけが必要だと考える。また地域の行事への参加については、育成会とも連携しながら児童が地域の行事に興味を持つような働きかけをしていきたい。

わかば支援学校との交流について

- ・項目18「支援学校との交流により思いやりの心が育っている」については、AB評価をつけた保護者の割合が昨年と同様の結果となった。児童は肯定的な評価が高いため、今後も交流を継続することで、児童の思いやりの心を育てていき、保護者にも交流の意義を認識してもらえるよう情報発信をしていきたい。

学校からの情報提供について

- ・項目19より、AB評価をつけている保護者の割合は97.6%と高く、学校からの情報がしっかりと保護者に伝わっていることがわかる。今後も、学校HPや学校、学年からの通信など積極的に情報発信に取り組んでいきたい。また項目20の学校設備に関する項目では昨年同様の結果であったが、一部改善を望んでいる保護者も見られた。

ゲーム・携帯電話・スマートフォンの使用について

- ・項目21については、評価に多少のばらつきがあるものの、総じて保護者と児童がきちんとルールを決めて取り組んでいることが分かる。他方でSNSの利用の危険性については、今後も保護者自身に危機感をもって子ども達に向き合ってもらえるよう、親子での研修等の機会を設定していくことが必要である。
- ・項目22については、携帯やスマートフォンを持っている児童の割合が昨年度より高くなっているため、児童、保護者ともに適切な利用についての働きかけを続けていきたい。項目23については、ルールを決めていない家庭の割合が若干上昇しているため、家庭でのルールをしっかりと決めるように機会をみて働きかけていきたい。